

校内研究実施計画書

1 研究主題及び教科

研究主題	『対話』を軸とした学びの深化 ～「個別最適な学び」と「協働的な学び」による、深い学びの実現と系統的な教育の推進～
教科・領域	全教科・全領域

2 主題設定の理由

本校では、【めざす学校像】として「明日も笑顔で来なくなる安心・安全で居心地の良い学校」、【めざす生徒像】として「主体的に学び合い、高め合う生徒」「一人ひとりの違いを認め合い、これからの社会を生き抜いていける生徒」を掲げている。

令和6年度まで、鈴鹿市教育研究会委託研究発表会を見据え、「授業力UP5★」を軸とした授業改善と、全教職員が主体的に参画する研修体制の構築に重点を置いて取り組んできた。ICT機器の効果的な活用や思考を促す手立てに注力して実践を行った結果、公開授業と教科横断的な協議を通して、ICT活用のノウハウが校内に広く共有されただけでなく、教職員自身がこれまでの自らの授業を「一方的な教授型」とであると自覚できたことが最大の成果であった。この「自覚」は、目指すべき生徒主体の授業へと転換するための重要な第一歩となった。しかしながら、授業改善等に係るアンケート調査の結果において、「授業の振り返り」に関する肯定的回答が令和5年度の100%から82.8%へと急落した。これは、学習指導要領が求める「身につけさせたい資質・能力」と、実際の授業での「まとめ・振り返り」が十分にリンクしていない現状を示唆している。授業づくりにおいては、単に活動をこなすだけでなく、生徒自身が「何ができるようになったか」を実感できる質の高い「振り返り」の確立が大切であると課題が挙げられた。

そこで令和7年度より、これらの具現化に向け、特に「対話」を軸に据えた授業改善に取り組んでいこうと考えた。学ぶことの本質は、自身の世界を広げることにある。書物を通じて知識を得て、多様な他者と対話することで考えを深める。そうした営みを通じて、主体的・対話的で深い学びを実現することこそが、学校という場でできる学びであると考ええる。本校の生徒は、外国籍や支援を要する生徒、複雑な家庭背景を持つ生徒など、極めて多様な実態がある。自制心や自己肯定感の低さ、仲間とのつながりの希薄さから、挑戦へのあと一歩が踏み出せない場面も少なくない。一方で軽やかなフットワーク、豊かな自己表現力、そして高いポテンシャルとチャレンジ精神という「強み」をどう輝かせるかが、私たち教員に課された大きな課題であると考ええる。その課題解決の鍵は、生徒を導く私たち教員自身の在り方にあると考ええる。これまで個々の指導力は持っていたが、横の連携が不足し、教育活動が「点」に留まりがちであった。子どもたちに協働や対話を求めるならば、まずは私たち教員自身が互いに対話し、学び合い、信頼し合う姿を見せることが不可欠である。そこで人権教育と道徳教育を教育の揺るぎない土台とし、他者の声を受け止める力や傾聴する力を学校全体で育てていく。そして、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、教職員一人ひとりの能力をつなぎ合わせることで、「点を線にする」系統立てた教育を実践するために、令和7年度を基盤構築期とした。令和8年度は前年度の内容を踏襲し、実践展開期と設定し、次期指導要領の動向を注視しつつ、各教科で「こどもたちが自走する学び」を加速させる年度とした。ICTを効果的なツールとして活用し、授業規律と自由進度の最適なバランスを模索する。多様な個が認め合

い、共に未来を切り拓いていく学校を目指し、私たちはこれからも対話を重ねながら歩み続けていこうと考えた。予測困難な社会を生き抜くためには、他者との対話を通じて考えを広げ、自らの学びを深めていく力が不可欠である。そこで、GIGA スクール構想の定着を踏まえつつ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させることで、すべての生徒にとっての深い学びの実現を目指していくため、先述した研修課題を設定した。

3 研究内容及び方法（具体的な手立てまで詳しく書いてください）

<具体的方策>

（１）対話を大切にした授業実践

- ・授業内に「生徒同士が対話する場面（ペアワーク、グループワーク）」「協働する場面」を意図的に設定。
- ・単に話し合うだけでなく、他者の意見を聞き、自分の考えを再構築する「対話的な学び」の質向上を目指す。

（２）振り返りの充実（質的向上）

- ・「めあてと正対した振り返り」を徹底し、書いて終わりにさせない指導を行う。
- ・＜振り返りの４つのポイント＞から、記述内容の深化を図る。
 - 1.自分の気づきや伸び、課題
 - 2.過去に学んだこととの照らし合わせ（既習事項の活用）
 - 3.仲間の言動から学んだこと（他者参照）
 - 4.学びの方法（メタ認知）

（３）個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

- ・ICT 端末（タブレット）を効果的に活用し、個々の進度や興味に応じた調べ学習やドリル学習（個別）と、共有ツールを用いた意見交換（協働）を往還する授業デザインを試みる。
- ・一斉授業の中でも、「個で考える時間」と「集団で練り上げる時間」のバランスを見直す。

（４）教科部会の充実

- ・時間割上で教科部会のコマを設定し、研究主題に迫る教科研究を行う時間を確保する。
- ・教科ごとの特性に応じた「対話」の在り方を協議する。
- ・各教科で教材研究を共同で行い、具体的な単元計画への落とし込みを図る。

（５）校内研究授業及びプチ公開授業の実施

- ・年２回（９月、２月）に研究公開授業を全教科で行う。
- ・形式的な研究授業だけでなく、日常の授業を互いに見合う「プチ公開」を実施し、教職員間の対話（同僚性）を高める。
- ・教科部会の時間を活用し、教科内での提案授業を年間１人１回行う。

4 年間研修計画

月	日	曜日	研修内容
4月	7日	火	本年度の研修の方向性・生徒指導研修
4月	15日	水	生徒支援研修（合理的配慮、すずっこファイルについて）
5月	20日	水	生徒支援研修（教育相談）
6月	17日	水	人権道徳推進研修
8月	3日	月	小中連携研修

8月	26日	水	研究授業およびプチ公開授業について、
9月	30日	水	第1回校内研究授業
10月	21日	水	「主体的な授業」づくりについて
11月	18日	水	国際教育研修
1月	21日	木	本年度の実践のまとめ
2月	10日	水	第2回校内研究授業
2月	17日	水	次年度に向けて
3月	10日	水	次年度の研修について